

「パリパリと音を立てて タクアンを噛みたい」を実現

医療技術職員 清水 裕次(しみず ゆうじ) 歯科技工士

歯医者さんと連携して義歯(入れ歯)などを作るのが歯科技工士さんの役目で、一人ひとりの患者さんに最適のものとなるよう工夫された、すべてオーダーメイドの作品です。

子どもの頃からモノづくりが好きで、プラモデルや簡易ラジオの製作をしていた清水さんが、医療系の仕事で自分に適している「難しいが面白そうだ」と関心を持ったのが歯科技工士の世界でした。材質についての工学的な分野と、一つひとつ手作り製作というものづくりの匠の世界に、面白さとやりがいを見つけたことがきっかけです。

高齢化や病気で歯や口の機能に障害が出ると、噛む、飲み込む、話すといった動作に支障が出ます。食に関する障害は健康にも大きく影響しますし、会話に不自由したり、見た目を気にすることが生活の質を低下させる悪循環につながります。「ちゃんと噛めることの喜びはとても大きくて、若い頃のように音を立ててタクアンが食べられるようになったといった感激の声を聞くと、自分自身もとても嬉しい」(清水さん)。

歯科医師と密接に連携をし、患者さんと直接面談しながら細かい要望を聞けるのも大学病院の歯科技工士ならではのことで。

「学生実習のとき高校生の女の子の前歯が欠けたのをきれいに治してあげたら、本人はもちろん親や歯科医師の先生もみんなとても喜んでくれました」と清水さん。患者さんの喜びを共有できることがこの仕事の醍



醐味といえるようです。職人的な匠の技はもちろんですが、インプラントやコンピュータによる設計などハイテク技術に通じていることも求められ、日々研鑽が求められるとても奥の深い分野でもあるのです。